

(抜 刷)

「散砂」「群氓」「亡国の民」に彷徨う

中国人「国民性」への認知

——敗戦まで日本インテリ層の中国認識をめぐって

趙 軍

千 葉 商 大 紀 要

第54巻 第1号

2016年9月

## 〔論 説〕

# 「散砂」「群氓」「亡国の民」に彷徨う中国人「国民性」への認知

## ——敗戦まで日本インテリ層の中国認識をめぐって

趙 軍

1894～95年の日清戦争を通じて中国を大敗させた日本国内では、にわかに「清朝蔑視論」が勃興し、これまでの中国に対する認識とイメージを一変させた。その後、「清朝・中国蔑視論」はさまざまな形で日本社会に流布し、1945年8月の敗戦まで続いていた。インテリ層の中でも優越感を抱く姿勢や一方的な視点で「中国」と「中国人」を観察する者が増え、彼等の認識と主張は近現代日中関係の推移に大きな影を落とした。「支那通」あるいは「エリート」と呼ばれたこれらの人々の「中国認識」について、中国人の「国民性」に対する認知を中心にいくつかの具体例を通して、その思想的・文化的背景や特徴及び歴史の推移に対する影響を考察して行きたい。

### 一、「砂の集まり」の民族——川島浪速の『対支那管見』

近代日本の「支那通」の中では、川島浪速(1865-1949)は先駆者的な存在の一人である。1894年の日清戦争と1900年の義和団運動期間中、彼は二度にわたり日本派遣軍の通訳官として従軍した。八カ国連合軍が紫禁城の神武門を外側から攻めた時、川島は中国語で護軍の将校に籠城の不可などを繰り返し論じ、翌日、東華門は内側から開かれ、連合軍は一弾も発せず紫禁城に入城できた。北京占領中、川島は軍政署軍事警務衙門の一員となり、1901年4月より中国人を対象とする警察教育を開始させた。まもなく、軍事警務衙門が北京警務庁と改称され、川島浪速は総監督に就任し、清朝政府の「客卿(お雇い外国人官吏)」となった。

1912年、川島浪速は『対支那管見』<sup>(1)</sup>という意見書をまとめ、自分が「長年月間ニ於ケル支那観察ヲ務メテ」得た体験と感想を紹介し、中国の形勢から中国社会、中華民族の特徴まで幅広く自分の見方を披露した。その「緒言」の冒頭で川島は、日本人が中国を見る時にしばしば「支那不可解説」に陥りやすい原因は、「支那人通有ノ性格」を理解していないためだと指摘し、「支那ニ於ケル出来事ハ多クハ是レ支那人通有ノ性格カ激動シテ沸湧シ来ルモノナリ」なので、それを理解しなければ「正しい」対中国政策が樹立できないと中国人の民族性を理解する問題の重要性を強調した<sup>(2)</sup>。

川島の言う「支那人通有ノ性格」とは、「社会的膠結力」が欠ける「亡国の性格」であるという。彼は、

「支那人ハ五千年来旧文明ノ為ニ既ニ爛熟腐朽シ来レル民族ニシテ社会的膠結力殆

(1) 表紙には「代謄写」の標記があったが、出版元などは一切不明なので、配布用の小冊子として印刷されたものではないかと考えられる。

(2) 川島浪速『対支那管見』緒言、2頁。

ト消耗シ四億万ノ分子ハ恰モ砂ノ如ク到底堅固ナル団結体ヲ自動的モ造り出スコト不可能ト為リ所謂亡国的性格ハ近キ数百年間ニ著シク成熟シ来レルヲ以テ近キ将来ニ於テハ支那人中何人カ如何ナル政体ヲ応用スルモ決シテ統一ヲ成立セシムル望ナキコト」<sup>(3)</sup>

と述べた。

川島の言う「中国人」とは、中国人の主体である漢民族を指すだろうと考えられる。その「中国人」の人々を一団の「砂の集まり」と譬えたことは、川島の得意な表現であり、彼は後に次のような比喩を繰り返し宣伝した。「夫レ砂ノ性タルヤ其個体ヲ換スレハ固結石ノ如ク自体ヲ保守スル力強固ニシテ容易ニ碎ケス。……然レトモ砂ハ其個体カ余リニ堅固ナルカ為ニ粘着力全ク消滅シ多数ヲ引寄せテ之ヲ結フモ遂ニ団結体ヲ作ルコトヲ得ス」というのだ<sup>(4)</sup>。彼は、このような砂粒の如く自己防衛が固く一方で同族間の団結力が弱いことを、中国人特有の性格であると断言した。そして、このような性格が生まれた原因といえ、やはり中国人の心の中に潜んでいて、強すぎるほど発達している「利己心」のせいであると分析した。「由来漢民族ノ大缺点ハ利己心ノ方外ニ発達セルト巧黠怯弱ナルニ在リ其性情ヲ通評セハ総テ女性的ニシテ毫モ男性的意味ヲ有セス偶々残酷暴乱ノ行為又ハ悲憤激烈ノ挙動ヲ為サルヲ総テ是レ婦女子カヒステリーの狂態ヲ為スニ異ナラス決シテ堂々タル男性的勇氣ノ発動ニ非ス」という<sup>(5)</sup>。そのため、彼はこの特徴を中国「国民性」の「陰化」と呼び、これこそ中国の「亡国ノ兆」と断言した<sup>(6)</sup>。

総括すれば、川島が作り上げた「中国人」の民族性には、以下のようないくつかの特徴が見られる。①「利己心ノ方外ニ発達」していること、②「堂々タル男性的勇氣ノ発動ニ非」ず「陰化」的性格の持ち主であること、③「社会的膠結力殆ト消耗シ」たため、「到底堅固ナル団結体ヲ自動的モ造り出スコト不可能」であること。

川島のこの論理からすれば、中国社会はいつまでも一団の砂のままのはずである。中国人自身だけの力で革命や改良、王朝交代を実行するにしろ、現状を維持するにしろ、いずれにせよ列強に分割される運命は避けられない。ここから脱出する唯一の道は、日本に頼って、日本の「指導力」或いは支配のもとで日本の与国になるしかない。それと同時に、日本としては先ず「満蒙」地方を、続いて中国の中原地域を次々と征服し、勢力を中国全土に伸ばせば、自国を増大・増強することはできる。その上、「亜細亜ノ主人公」の資格を用いて「列強ヲ制束、指導シテ」、そこで日本「大帝国ノ基礎」を確立し、日本天皇の「皇恩」と「恵み」を天下に敷くことも、難しくはないという<sup>(7)</sup>。

「吾人ノ所見ニヨレハ到底自治自力ノ能力無キ(漢)民族ハ永遠紛擾争闘シテ遂ニ相率ヒテ大地獄界ニ沈淪スルニ過キス寧口取テ以テ我有ト為シ我至仁ナル。皇恩ニ沐浴スルコトヲ得セシムルハ即チ彼等ヲ済度スル所以ニシテ抑モ亦タ我王道ヲ世界ニ伸フルノ道タルヘシ」<sup>(8)</sup>。

(3) 川島浪速『対支那管見』3頁。

(4) 『対支那管見』18頁。

(5) 『対支那管見』16頁。

(6) 『対支那管見』16頁。

(7) 『対支那管見』32頁。

(8) 『対支那管見』30頁。

こうして、「中国人」の「民族性」に関する議論は、近代日本が取る中国に対する帝国主義・軍国主義的な政策のために、「正当性」を根拠付ける理論を生み出した。これこそ、川島浪速が『対支那管見』を著した最も重要な政治的目的であろうと言える。

川島浪速は議論を好んだ人間というだけでなく、持論を積極的に実施する陰謀家でもあった。第一次と第二次「満蒙独立運動」は、日本陸軍、外務省と財閥の支持の下に、『対支那管見』で構想された「満蒙」地域に日本の「立脚地」を作るプランの第一歩と見なして良い<sup>(9)</sup>。

どの民族においても、各々の長所と短所があり、中国人も当然例外ではない。特に利己心の発達、社会的問題や公益に対する無関心などの欠点が確かに中華民族の主要な弱点の一つであることは、孫文、魯迅などの先駆者から現代中国の一般民衆までも広く認識している。

顔徳如の集計によると、孫文は一生涯、少なくとも「一片散沙（中国語では砂に通ずる漢字）」について25回、「一盤散沙（皿いっぱい散砂）」について2回言及したことがあるという<sup>(10)</sup>。最初の言及は、川島浪速の『対支那管見』より約1年早い1912年4月10日に、「在湖北軍政界代表歡迎会的演説」の中に確認することができる。但し、その時の「一盤散沙」の意味は、規律が破壊されたままの政府機関を指す比喩として使われたので、民族性・国民性との関連性は極めて薄い<sup>(11)</sup>。民族性・国民性に関して言及した例は、「中国四億の民衆はまるで一団の散砂のようだ。これは生まれつきのものだろうか？ 実は異民族による独裁政治の結果だ」<sup>(12)</sup>。「傍観している外国人は中国人が一団の散砂であると言う。その原因はどこにあるか？ 一般の人民は家族主義・宗族主義だけは持っているが、国族主義は持っていないためだ。……故に、中国人の団結力は、宗族までとなり、国族主義の段階まで届いていない」<sup>(13)</sup>などである。これらの例は「中国四億の民衆」「中国人」などの表現を使っているため、民族性・国民性に関する議論であると判断できよう。政治家としての孫文は、「一団の散砂」という譬えを使って中国人の団結力の欠如を批判し、「国族主義」（「家族主義・宗族主義」を乗り越えたもの、民族主義と理解できるもの）の確立を訴え、新しい「中華民国」のもとでの国民の団結を呼びかけたのである。そして、「一団の散砂」という特徴は「異民族による専制支配」の産物であり、中華民族の「生まれながら」の致命的な欠点ではないと孫文は見えていた。川島浪速と同じような比喩を使っていたが、分析の手法と結論はまるで正反対の方向で展開されていった。

一方、「一盤の散砂」の最初の出典は、梁啓超の「十種徳性相反相成論」という説もある。この文章は清朝末期の1901年6月16日と7月6日に書かれた政論文であり、その中で梁啓

(9) いわゆる「満蒙独立運動」と川島浪速との関係の詳細について、拙著『アジア主義と中国』（亜紀書房1997年）の第五章を参照されたい。

(10) 顔徳如：「孫中山“一片散沙”説析論」、<http://www.aisixiang.com/data/81068.html>。

(11) 孫文の演説の原文は「自光復以来、共和与自由之声甚囂塵上、実則其中誤解甚多。盖共和与自由、專爲人民說法、万非爲少数之軍人与官吏說法。倘軍人与官吏借口于共和与自由、破壞紀律、則国家機関万不能統一。機関不統一、則執事者無專責、勢如一盤散沙、又何能爲国民辦事？是故所貴夫機関者、全在服從紀律。如機械然、百輪相錯、一条不乱、而機械之行動乃臻圓滿」という内容である（『孫中山全集』第2巻、北京・人民出版社1982年、334頁）。

(12) 孫中山：「建国方略」、『孫中山全集』第6巻、北京・人民出版社1985年、412頁。日本語訳は筆者。

(13) 孫中山：「三民主義・民族主義」、『孫中山全集』第9巻、北京・人民出版社1986年、185頁。日本語訳は筆者。

超は、「独立」と「合群」(多数の独を合して群と成す)という相反しながら相成る「徳性」について論じた時、「我が中国には群がないと言えるのか? 固より四億人に昇る一族は数千年にわたってこの地に集まり居住している人々である。そればかりではなく、地方自治も早くから発達していて、各省には無数の小さな群が存在している。同業連盟の組織も緻密に構成され、四民の中にも無数の小さな群が存在している。にもかかわらず、一盤散沙の誹りを受ける結末を避けられなかった。なぜか、合群の徳性がないことによるものだ」と述べ、中国人の社会には全く集団や集団性がないという訳ではなく、「合群の徳性」即ち集団化の精神がないためだと自分の見解を披露した<sup>(14)</sup>。ここでの「一盤散沙」の表現には集団を構成する力の弱さを指す側面もあると考えられ、孫文の言説より遙かに早かった。ただし、「一盤散沙の誹りを受け」ているあたりから見れば、梁啓超によって創始された言葉ではないことは明かである。

近代中国の大文豪である魯迅も「一盤散沙」を最大の特徴として中国人の民族性を深く掘り下げ、痛烈に反省した代表的な知識人の一人である。「声なき中国」という香港青年会での講演では、「文明人と野蛮人の区別は、第一に、文明人には文字があって、それを手段にして自分たちの思想や感情を、多くの人に伝え、また未来に伝えることができる点にあります。中国には、文字はあることはありますが、すでに大衆とは無関係なものになっていて、古くさい内容を難解な古文の形に盛ったものばかりですから、すべての声が過去の声であって、ほとんどゼロに均しい。従って皿いっぱいに砂をまいたようなもので、お互いに理解しあうことができないのであります」と語っている。これは魯迅作品の中で中国人の民族性を砂と例えた最初の例であると言われている<sup>(15)</sup>。魯迅のこの話は、漢字・漢文の難解が原因で、中国人の大半は自分の意思や存在すら、外の社会に伝えることが出来ず、互いに意思疎通も出来ず、まるで「皿いっぱいに砂をまいたようなもの」のようだ、という主旨である。着想はかなり違ったが、中国人同士の相互不理解、しいては互いに束ねるチャンネルが足りない状況を譬える手法に川島浪速と多少類似しているところがあると言える。

しかし、中華民族の弱点形成のプロセスには、さまざまな歴史的要因があり、時代や社会的環境が変化することにより、これらの弱点は次第にある程度の克服や改善される可能性もあり得る。特に内外情勢が激しく変わりつつありながら、国民国家が速いスピードで成長していた近代中国において、固定的な視点で中国の社会を観察することには、大きなリスクが孕まれていることは間違いない。人々の心の深層に流れている、時代の激変に対する不安・騒動・期待・恐怖など複雑な様相からなる底流を察知せず、もしくは見ないふりをして、社会の表面に現れている「不変」的なものに囚われて、それを「通有の……」「固有の……」という固定的な視点で認識すれば、中国社会の事実・現状に合わない中国に対する「誤認識」につながってしまう。残念ながら、このような「誤認識」はその後、日本人インテリ層の中国人国民性・民族性認識の主流になっていった。

## 二、「支那は一の畸形国なり」——内田良平の『支那観』

(14) 梁啓超「十種徳性相反相成論」、『清議報』第82冊、第84冊。梁啓超『飲氷室合集・文集』中華書局1989年版。

(15) 「無声的中国」、漢口『中央日報』副刊、1927年3月23日。日本語訳は竹内好個人訳『魯迅文集』第四巻、筑摩書房1983年、96頁「声なき中国」より。



辛亥革命前後、中国人の国民性をやり玉に挙げた論客には、内田良平や井上雅二らもいる。彼らも中国人の国民性は「劣悪」なものであり、自主性や自強する力がないと結論づけ、未来中国の前途は日中の「提携」と日本の「助け」によってしか列強に対抗する道がないと宣言し、日本を盟主とする「亜細亜聯邦」樹立のための世論工作を展開した。

1913年10月、対外民間団体「黒龍会」のリーダーである内田良平(1874-1937)は『支那観』という著書を公刊し、「支那人」を「読書社会」「遊民社会」「農工商社会」という三つの階層に分けてその「国民性」を分析した。彼によると、中国では国民の大半を占める「農工商の如き、唯だ個人の利益を逐うて生活するものを謂ふ、彼等は全然個人本位にして、個人の生命財産だに安全なるを得ば、君主の如きは戴くも可なり、戴かざるも可なり、其国土の如何なる国に属するが如き、強いて問ふ所にあらず」、また、「支那の一般国民」は、「国家の何物たるを解し、憲法の何物たるを解し、民権の何物たるを解し、自由の何物たるを解し」ていない平々凡々な民草であり、革命や政治などに全く無関心の存在であると断言した<sup>(16)</sup>。かつて内田良平自身も1911年10月武昌蜂起の直後に、「革命は、支那の国性なり、支那の天下は、革命の天下なり。支那帝国が、今日亜細亜大陸の上流を占め、古羅馬帝国の如き大領土を擁し、四千年の歴史を有し、四億の民衆を有し、猶能く世界に存立する所以のものは、他なし、国民の革命の精神ありしを以てなり、支那にして、国民の革命なからしめん乎、支那帝国は、古の羅馬、印度、埃及、波斯と同じく亡国の運命に陥りしなるべし」「支那の革命は、第二十世紀における世界変局の最とも大なるものなり。第十八世紀に於ける仏国の革命は欧州大陸の変局を促したると等しく。支那の革命は、亜細亜諸邦の変局を促し、其結果、世界機運の消長に影響すること少小ならざるべし」<sup>(17)</sup>として中国の辛亥革命運動を盛大に謳歌したことはある。しかし、『支那観』を執筆する時点になると、内田良平は辛亥革命が「畢竟一部外国遊学生等の洋籍を生吞活剥したるに過ぎず、一般国民に在りては、政事のために自家の産業を妨害せらるゝは、寧ろ其苦痛に耐えざるもの」と判断し、さらに「支那は一の畸形国なり」、「支那の革命なるものは、泰西の謂ゆる革命なるものとは、原因を異にし、経過を異にし、結果を異にし、決して同一視すべきものに非ず」と中国の「革命」を根底から否定し、「中国人」の「国民性」に対する分析から「支那の革命」は本物ではなく、結局一般民衆に「苦痛」をしか与えない茶番劇であると断言した<sup>(18)</sup>。

内田良平はさらに中国の「黄漢民族<sup>(19)</sup>」を猯<sup>(20)</sup>という動物に譬え、「人類社会ニ高等種族トシテ」の素質を持っていない低等民族であると罵った。

「……秦漢五代以降黄漢民俗ノ社界ハ統一セル安固ナル秩序ノ上ニ政化ヲ布ケルコトハ素ヨリ幾許ノ年月ナシ。彼ノ清朝ノ季末以降黄漢人ノ思想界ハ猯的性能ニ化了シ、殆ンド人類社会ニ高等種族トシテ認メ得ベキ徳性ヲ余サズ。此民族ニシテ共和同治ノ社会ヲ創成スルハ実ニ木ニ憑リテ魚ヲ求ムルノ企望ト愚考仕候」という<sup>(21)</sup>。

(16) 内田良平『支那観』（黒龍会、大正2年）、31.36頁。

(17) 内田良平「支那改造論」、『内外時事月函』一九一一年十二月号、12—13.3頁。

(18) 内田良平『支那観』、35-36、6-11頁。

(19) 内田良平の造語、「黄色人種としての漢民族」という意味に基づいた造語と考えられる。

(20) 『広辞苑』によれば、「中国で想像上の動物。形は熊に、鼻は象に、目は犀に、尾は牛に、脚は虎に似、毛は黒白の斑で、頭が小さく、人の悪夢を食うと伝え、その皮を敷いて寝ると邪気を避けるという」。

(21) 小川平吉文書研究会編『小川平吉関係文書』2、みすず書房1973年3月発行、68-69頁。

内田良平のこの分析は、『支那観』の延長として、「黄漢民族」の「高等種族トシテ認メ得ベキ徳性」に対する徹底的に否定した姿勢が大きな特徴となっている。僅か2年前の彼の言論と比べると、180度の大転換というより、見事な自己否定とも言えよう。なぜ「無節操」と見なされても意に介せず、このような「自己否定」までの大転換をしなければならなかったのだろうか？実は、周辺民族への侵略行為を、遅れた民族に対する「解放」「慈悲」と強引に解釈させるため、内田は哲学、政治理論、政策方針などイデオロギーの分野であらゆる中国の政治家、思想家など「読書社会」の存在を否定しただけではなく、また一歩進んで、民族性の角度から「黄漢民族」が「弱肉強食」という世界競争の舞台における存在価値を徹底的に否定しようとしたのである。

結論として、内田は「支那は寧ろ不保全を以て保全し得らるべきなり」という方策を打ち出し、これから日本政府も「列強の為す所の如く、冷頭冷血、彼の存亡を以て彼自ら存亡するに任じ、我は之に対して専ら高圧的手段を取り、酷烈に我が勢力を扶植し、厳密に我が利益を攫取することに在るなり」、「即ち一面高圧的手段を以て、彼等の政治社会を威服し、一面放任主義の下に彼の農工商社会を保護せば、支那を駕馭するは、掌を反すよりも更に容易たるべし」と、赤裸々な侵略方針と必要な手法を提言した<sup>(22)</sup>。そして、具体的な中国侵略の方策について内田は、「先づ南満州及び内蒙古を経営し、大陸に於ける帝国の優越なる地歩を占取し、列国の支那本土に対する分割の勢を掣肘し、以て南方に向かって我経済的勢力を進むるに在り」という段取りを考案し、北から南へ、領土拡張と経済勢力の拡大を並行して推進する中国侵略の戦略を立てたのである<sup>(23)</sup>。「在野」的な立場を守りながら、内田らが当時の政権与党よりもいわゆる「大日本帝国」の「国益」の擁護と「発揚」を最大限に配慮していた政治勢力の一つと言えよう。

内田良平、川島浪速らの「支那民族性」論は決して偶発的な議論ではなかった。むしろ、当時の日本社会における「支那認識」「支那人イメージ」の代表的な議論の具体例とも言える。実際、同じ時期或いはやや早い時期の雑誌にざっと目を通せば、類似の言論を数多く発見できる。例えば、『太陽』雑誌第二号には、高等商業学校教授の飯田旗郎は「亜細亜の大商戦」という文章の中に中国人を「最強の商業人種」として挙げながらその主要な欠点を「吾占領地に於ける大清民は吾新主権を認め、誠実に心服せりと、清人の多くは政府の如何に頓着なく、其主権者の何姓なるは多く措て問はざるが如し」、「多く立国心なく、名誉権利心に薄く、神経に鈍く、只々獸類的の実利に眩惑せるのみ、之を得意とすること」と論じたことがある<sup>(24)</sup>。また、同じ雑誌の第五号「論説」欄には、久米邦武は「論理の改良」という文章の中に、「日本は支那の如く倫常の空文はなけれど、実際に家族親睦し、本家末家を相統括する研究は頗る発達したり。其効力は今度の戦争に顕はれ、日本は愛国心に富み団結に固けれど、支那は国家的の思想に乏しく親和力もなし」、「日本の風俗は国家の結合も家族の親睦も遙かに支那より篤ければ、忠孝の行も自然的に篤し」と論じた例もある<sup>(25)</sup>。見方の出発点と深さなどは多少違いがあるかも知れないが、川島浪速や内田良平らの「支那民族性」の認識とは「異曲同工（曲調は異なっても巧みさは同じ）」のものと見なされても

(22) 内田良平『支那観』、59頁。

(23) 内田良平『支那観』、73頁。

(24) 『太陽』第壹卷第貳号、1895年2月、232～233頁。

(25) 『太陽』第壹卷第五号、1895年5月、812-813、815頁。

差し支えがないと思う。

多少変化的視点で「支那民族性」を論じたのは、大川周明である。

大川周明は、「もとへ支那人が道徳的な民族であつた」と、川島浪速や内田良平と違う立脚点から議論を展開したが、今は「確かに本来の勝れた素質を失つて居ることも事実であり」、そして「事実今日の支那人は、自分自身で道を行はうといふ努力は欠けて居るやう」であるが、なお「徳を尊び道を重んずる心」、つまり「具体的には道を体得した人間に対する尊敬心を持つて居る」のである。「而も其程度が恐らく、日本人よりも高からうと思ふ」という。「支那民族」の特徴はその「現実的、倫理的」なことであり、国家観念がないところにある。<sup>(26)</sup>

大川はさらに政治史の角度から「儒教の政治理想」を取り上げ賞賛しながら、それは「支那に於ては竟に実現せられなかつた」と言い、「それが最も善く実現されたのは、実に吾国の徳川時代に於いてゐる」、「日本民族の政治的才幹が遙かに漢民族より優れるためでもある……支那が儒教をもてはやせるに拘らず、後に混沌乱離を繰り返したるは、儒教の政治理想が正しからざりしたためでなく、罪は漢民族自身の政治的無能に帰せられるべきものである」という結論に達した。<sup>(27)</sup> 大川周明の論理には、やはり、儒教と中国の伝統的哲学などを研究した経歴を持つため、川島よりも学問的なイメージが強い。しかし、「政治的無能」という判断はやはり一面的な話で、結論として中国政治の長期的停滞状況の根本的な原因はまだ分かっていない。

総じて見れば、1930年代まで日本の知識人、民間人たちによる「支那民族性」「分析」は、大半は拡張主義や軍国主義などの対外政策を主張・宣伝する目的で行われたものなので、僅かな事実関係を摘み取ってそれを「論拠」とし、中国社会の全体を概観しようとした「研究」成果ではない。なぜならば、その多くは客観性も科学性もなく、中国民衆及び中華民族のごく一般的な特徴でさえも総括できていない。しかし、大川周明らの論著は、出版物として社会に広く流布し、川島浪速・内田良平らの論著も『内外時事月函』などの雑誌で掲載され、その上「非売品小冊子」として日本政府・中央官公庁・軍部関係者に無料配布の形で流布し、「支那蔑視論」に民俗学・社会学的な論拠を提供し、その更なる広がりには拍車をかけた。

### 三、インテリが「良識」を踏みにじった瞬間——平野義太郎らの「転向」

川島浪速、内田良平などの「大陸浪人」や「右翼」民間人の「支那民族論」の認識と違い、1930年代以降、かつて「マルクス主義法学者、社会運動家」「講座派マルクス主義の中心的主張者」<sup>(28)</sup>と称せられた平野義太郎ら「左翼」知識人の政治的「転向」と、それに伴う中国文化・政治、中国人「国民性」に関する議論は、軍国主義・帝国主義的対外政策の前に、「良識」「学識」の敗北で勝敗を分けた戦いであった。

学者という身分から公然と中国文化や中国人の民族性・国民性を蔑んだ言論を発するのは適当できないという配慮による結果だろうか、平野は戦時中の代表作『大アジア主義の

(26) 大川周明「中国思想概説」、『大川周明全集』第三卷、岩崎書店昭和37年、99-100頁。

(27) 大川周明「中国思想概説」、『大川周明全集』第三卷、岩崎書店昭和37年、93-94頁。

(28) 『スーパーニッポニカ』電子版「平野義太郎」、『講座派・労農派』。



歴史的基礎』<sup>(29)</sup>の中に、まず「支那・印度文化の没落」、日本文化への「無知」「貧しい理解」を批評する形で日本文化の優越性を際立たせて、日本民族は東洋文化の唯一の綜合者・体现者、そして東亜・大東亜・東洋の天然的領袖であると主張した。

「日本民族は、まづ第一に、支那及インドの文化を吸収して、日本自身の国体思想を完成した。それは支那及インドの文化をその固有の香気を残しつつ、しかも完全に自身の懷ろのなかに融合同化した。その点、支那民族が仏教を同化しすぎて道教の一分支となし、インド的なものを全く喪失させたのと著しい対照を示してゐる。加ふるに、かくの如く支那民族は漢印両文化のよき融合者でなかつたばかりでなく、かれらは日本文化に対しても至つて貧しい理解力を示したにすぎなかつた。況してインド民族は支那及日本の文化なり思想なりに対して殆んど全く無知で過ごして来り、むしろこの数世紀は西洋文化に引きずられて了つた。然らば、日本民族こそは、東洋文化の唯一の綜合者であつたことを、歴史において実証してゐるのである。」<sup>(30)</sup>

仏教文化に対する継承と吸収の違いによって、日本文化と「支那」、印度文化の優劣を論ずる一点張りの論法は、元より学者として恥すべき手法であるにも拘らず、平野はこの僅かな論拠の上に立てられた弱い結論に関し、さらに恣意的な拡大解説をした。

「ここから、日本民族の東洋渾一の垂範的立場が確立せされ、……」「この大日本といふ主体なくしては、アジアの自覚はありえず、アジアはもつとみじめな隷従的地位に甘んじていたであらう。アジア復興の起点は実に日本であつた。」<sup>(31)</sup>

と日本の「アジアの先覚者」としての地位を強調したのである。

中国・中国人の国民性に関する議論において、平野義太郎と川島浪速・内田良平らとの大きな違いの一つは、中国人の国民性・民族性に対する差別的、直接的な批判が極めて少なく、その代わりに、歴史の「事実」を例として挙げ自分の理論の展開に利用したところにある。例えば、孫文の「大アジア主義」主張を論ずる時、平野は、

「中国の人士が建国の導師と仰ぐ孫中山は、……その思想の根本において大亜洲建設のための日支提携論であり、東亜における日本の指導的推進力に信頼を寄せてゐた。……大東亜建設に関する日本の主体的なかつ道義的な歴史的使命について、孫中山の認識は、今まで彼及び彼の思想の解釈者が考へたよりもつと深められねばならない点があることは事実であるが、しかしまた、彼が根本において終始一貫日本を推進力とする大亜洲主義の実現に全生涯を捧げたことは、もとより一点の疑ひを容れない。」<sup>(32)</sup>

「最も重要なことは、『中国と日本とは亜洲主義を以て太平洋以西の富源を開発するに對し、米国は亦そのモンロー主義を以て太平洋以東の勢力を統合し各其の成長を遂げる』においてのみ日米は『百歳無衝突之虞』なく、従つて、その場合に於てのみ『中国は日米を調和しうる地位にゐる』ものである。いひかへれば東洋人は日本を盟主として大東亜共栄圏を建設し、比喩的に言へば亜洲モンロー主義をとり、米国は建国の

(29) 河出書房、昭和二十五年版。

(30) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』「序」，「昭和十九（1944）年三月五日，太平洋協会に於いて」。

(31) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』「緒言」5～6,4頁。

(32) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』「緒言」4～5頁。

精神たる固有のモンロー主義を厳守さへしてゐれば、衝突の虞はないのである。」<sup>(33)</sup>  
と述べた。

孫文評価と関連して、平野は、日中戦争期間中に日本軍に協力する立場に立った汪兆銘を「孫文の衣鉢を継いで大亜洲主義運動に邁進し、中日合作の伝統的政策と東亜聯盟に力を注いで」いる人物<sup>(34)</sup>であり、「孫文思想の真の継承者」として見ていて、高く評価していた。

「……日本人とひとしくアジア人たる中国人は第一に中国の自主独立のため、第二に安危二つながら連関する日本と共に対米英決戦の主体となつて同生共死すべしといふ汪主席こそ、孫文の大亜洲主義を発展継承してゐる思想である。」<sup>(35)</sup>

最後の日本訪問の時、孫文が「大アジア主義」を演題とした演説の中に、「アジアの王道の干城となるか」「ヨーロッパの覇道の手先となるか」という二者択一の選択を日本の国民に迫り、第一次世界大戦を経た日本の対中国政策に対して「期待」と「警戒」が共存していた複雑な心境を表した。しかし、平野義太郎の孫文思想に関する論議の中では、日本における軍国主義の台頭と帝国主義政策の実行に対する警戒と批判は全く無視され、無条件的な「中日合作の伝統的政策」の提唱者としての孫文像が築き上げられた。即ち、平野義太郎の孫文評価の最大の問題点は、孫文思想中の日本依頼の側面を絶対化して説明し、その変遷を全く無視するところにあると指摘できる。いわば孫文の「大アジア主義」を自分の望むように化粧し直したのである。平野の本意は恐らく、中華民国の建国者、国民精神の領袖である孫文でさえ、「終始一貫日本を推進力とする大亜洲主義の実現に全生涯を捧げた」人間なので、孫文の発言は日中間における「日本の指導的推進力」の証明できる根拠になると考えただろうと推測できる。

熱烈な尊皇主義者、大陸浪人の先駆者でもある荒尾精の発言を引用して、「大アジア主義」と「わが皇国の国体」の精神の崇高さを証明しようとすることは、『大アジア主義の歴史的基礎』のもう一つの特徴である。

「荒尾精は興亜政策に関する所見を述べて、『欧亜の両陸は東西文華を異にし、紅白の二色は本来其の種族を同じくせず。所謂西力東漸なるものは直ちに二者の競争を意味す。されば、清国の老朽は、仮令、清国の為に悲まざるも痛く我国の為に悲まざるべからず。苟も我国をして綱紀内に張り、威信外に加はり、宇内万邦をして永く皇祖皇宗の懿徳を瞻仰せしめんと欲せば、先づこの貧弱なるものを救ひ、この老朽なるものを扶け、輔車相倚り、進んで東亜の衰運を挽回して、その声勢を恢弘し、西欧の虎狼を膺懲して、その覬覦を杜絶するより急なるはなし。是れ誠に国家百年の長計にして、また目下一日も忽諸に付すべからざるの急務なり。』」<sup>(36)</sup>

「荒尾精の興亜理念は、わが皇国の国体に基く八紘為宇の道義精神を左の如く説いてゐる。『我が国は皇国なり、天成自然の国家なり。我が国が四海六合を統一するは天の我国に命ずる処なり。皇祖、皇宗の宏猷大謨なり。已に然らば我国前途の最大目的は、その宏猷大謨を大成するの他に出でず。』」<sup>(37)</sup>

(33) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』132頁。

(34) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』72頁。

(35) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』6頁。

(36) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』26～27頁。

(37) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』28頁。

これは、荒尾精の「宇内万邦をして永く皇祖皇宗の懿徳を瞻仰」させ、「我が国が四海六合を統一する」ために「西欧の虎狼を膺懲して」「東亜の衰運を挽回」するプランであり、平野義太郎の賞賛した「興亜政策」のプランでもあった。

そして、平野はついに荒尾精の発言を引用する形で「支那民族性」に対する批判に共感を示した。

「支那を助けて東亜の大勢を挽回することは、我が国の使命であるが、しかし、生来、自尊自大の風を帯び、猜疑嫉妬の念が深い漢民族のことだから、東亜の交流と平和とを企てて、却つて支那が旧徳を忘れて新怨を構へ反噬を試みることはないか、と荒尾は、後年支那事変前後の状況を予見してゐたかの如くである。」<sup>(38)</sup>

学者の立場、とりわけ「講座派マルクス主義の中心的主張者」から「転向」した「大物」「左派」平野義太郎ら知識人の「大アジア主義」「わが皇国の国体に基く八紘為宇の道義精神」を擁護・解説する発言は、言うまでもなく、大きな影響力を持っている。しかし、「自尊自大の風を帯び、猜疑嫉妬の念が深い」云々は、実証作業が欠如していただけではなく、「旧徳」「新怨」など道徳的な概念を持って日中戦争の「是非」を問う手法も歴史研究者が取るべき姿勢と遙かにかけ離れている。故に故野沢豊氏は「平野氏の孫文評価は、まさにかかる時流に乗り、そのような内容のものとして登場しました。『大アジア主義の歴史的基礎』の第1篇は、巻頭を飾るに相応しくするために「日支交渉史」に大幅な加筆と、内容の修正を施したものでした。本書の刊行が敗戦直前となったことで、戦時下での孫文礼讃の役割を果たせぬまま、戦後に物議を醸す形となったのは、歴史の皮肉と言えましょう」<sup>(39)</sup>と、学者としての良知・良識を曲げて対外侵略戦争に迎合する平野義太郎らの姿勢を辛辣に非難した。平野のような『大アジア主義の歴史的基礎』の執筆活動は、まさにインテリたちが研究者としての「良識」を踏みにじった瞬間と言えよう。

#### 四、「濁流」の中の少数派の良識——宮崎滔天から矢内原忠雄、中西功まで

上述した実例と異なって、近代日中関係史上、少数派でありながら、謙虚な姿勢と冷静な目線で「中国」と「中国人」を見つめ、「中国人の国民性」を長所と短所に分けて客観的に分析し、日中兩大民族の相互理解と相互信頼を図ろうと努めた論者も存在していた。

まず、川島浪速・内田良平の同時代人である宮崎滔天の「支那人」に関する認識を見てみよう。

持論の「支那革命主義」を実施するために、「大陸浪人」の宮崎滔天(1870-1922)はかつて二度に亘って暹羅へ行ったことがある。その途中、滔天は生計のために祖国を離れた「クーリー(苦力)」と呼ばれる中国人労働者と同船した。苦力たちが座席を奪い合い、無遠慮に吐き散らしたり、立小便したりする様子を見て、滔天は思わず「豚群の露店」、「八百屋店の競進会」などのイメージを脳裏に浮かべていた<sup>(40)</sup>。しかし、それと同時に、苦力たちの無知

(38) 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』27頁。

(39) 「回顧と展望」、中国現代史研究会編『現代中国研究』第3号、1998年9月、107頁。この原稿は、野沢豊氏が1998年3月28-29日に開催された中国現代史研究会総会・研究集会における講演「回顧と展望」をもとに補綴・加筆したものである。

(40) 『三十三年の夢』岩波文庫版、138頁。

は向学心がないためではなく生活の貧困のためであり、また外国に行かざるを得ないのも自分の本心ではなく、他人からの虐待を受けたためだったと、苦力たちの立場に立って考えた。そこで「余が一行の百姓といえどもこれに近づくを欲せざる、一種の汚穢物なり。しかれども余は実に、彼らを熱愛するを禁じ得ざりき。余が一生を託すべき支那国民なりと思えばなり、余が大いに用いて以って人道回復の用をなさしむべき民と思えばなり」<sup>(41)</sup>のような観念の変化が始まった。

暹羅に着いてから、宮崎滔天はそこに暮らしている中国系住民の生活を考察した。数世代にわたる努力の結果、暹羅社会で高い社会的地位を勝ち取って社会的に重要な存在となった中国系住民の状況を見て、滔天の「支那人民」に対するイメージは一層大きく変わった。「暹羅に於ける支那人」という文章の中に、彼は「我邦人從來余り支那人民を輕侮するに過ぎたり。此人民は決して輕侮す可き人民に非ず。寧ろ英露の強よりも恐る可き人民なると信ず。今や支那国の存亡興廢に付ては重要問題として世人の均しく注視する所なり。是れ無論重要問題たるに相違いなし。然れども殊に支那人と云ふ一種の奇妙の人種には、猶ほ深く世人の注目留意せんを望む。思ふに戦争なるものは勝ても負ても一時の者なり。畢竟は人種生存の競争に帰す。人種の生存競争の終局は、社会經濟の理に依つて支配せらるゝものなるを知らば、支那人は将来の世界に於て実に絶大無比の勢力者たるを忘る可からず」<sup>(42)</sup>などと述べた。

「支那」の「人民は決して輕侮す可き人民に非ず。寧ろ英露の強よりも恐る可き人民なると信ず」、「支那人は将来の世界に於て実に絶大無比の勢力者たるを忘る可からず」という認識は、中国蔑視が盛んになった当時の日本においては、慧眼のある見方だと言える。この認識に基づいて、「支那」民衆の苦痛に同情し、「支那」の運命に関心を持ち、「支那」の未来に希望を託する人生観が滔天の脳裏に次第に形成された。

宮崎滔天が中国の民衆や中国の革命運動に期待を託した個人的な背景として、彼が当時の日本に対して、強い批判精神を貫いている点は留意すべきところである。

「何れの国と雖も國民を支配する元氣要素は必ずあるが、日本にはそれがなくなつて來た。政府は無方針で威張り、議會は御見方に後れざらんことを競ひ、軍人は分捕の多からんことを争ふ。學者に定見なく、宗教に信なし。國中悉く不真面目、不信實、無義理、不信仰を以て充されをる。此の如き状態で進んだら、結局亡國より外に到達点はあるまい」<sup>(43)</sup>。

当時の政治事情・社会事情から日本の「亡國（軍國主義・帝國主義政策の行き詰まり）」を予言したことには、滔天の見識の鋭さを読み取ることができる。滔天と川島浪速、内田良平らの大アジア主義など政治理念での違いは、この「民族性」論議の視点からも歴然と區別できる。

日中戦争期間中の左翼知識人の代表としては、中西功と矢内原忠雄を取り上げることができる。

社会運動家、日中戦争期間中長く満鉄調査部に勤めていた中西功（1910-1973）の中国研究の一番の特徴は、中国共産党研究であり、『中国共産党史』（北斗書院1946年9月）『中国

(41) 『三十三年の夢』岩波文庫版、109頁。

(42) 『宮崎滔天全集』第五卷、70頁。

(43) 宮崎滔天「乾坤銘廬日抄」、『宮崎滔天全集』第四卷、39頁。



革命と中国共産党』(人民社1946年),『中国共産党と民族統一戦線』(大雅堂1946年11月)などの著書が残されている。この研究を通して中西の中国事情に対する理解の深さ・的確さは分かるが、「中国人」の「国民性」との直接関連が薄いこと割愛する。

中西功の中国研究の二番目の特徴は満鉄上海事務所を中心として行われた「中国抗戦力調査」である。1939年に完成されたこの調査の報告書は、全部で十分冊から構成され、主に新聞や雑誌などの公開情報に基づいて、中国の経済・政治・軍事・文化など諸方面を実証的に分析し、「中国の抗戦力の形成の特殊性を正しくみよう」としたものである<sup>(44)</sup>。この調査に用いられた手法とその結論について、中西は毛沢東の著作である『持久戦を論ずる』と同工異曲の妙を得ていると自認し、その目的は、日中戦争状況下に置かれている中国側の有利と不利の要因を客観的に描き出すことによって、日本政府・軍部の「反省」と对中国政策の修正を促したいことにあるという。

『支那抗戦力調査報告』<sup>(45)</sup>「総篇」の中で、中西はまず1937年7月日中戦争勃発後の中国社会において現れた変化に注目し、それを中国の「抗戦力形成」の過程として捉え、さらにその諸要素を分析した。「日支双方の力量は初期の段階に於いては非常に懸隔があつた。これは日支戦争における一つの特質である。而もこの力関係の懸隔が決して単に量的なものではなく質的なものに基因してゐる点が、日支双方の抗戦力形成に於いて、又は支那抗戦力形成の観察に於いて決定的に重要なことゝなつてゐる」<sup>(46)</sup>。中国の「抗戦力」の「特質」と言えば、中西はまず「日本の近代的な強力な反撃の前に於いて、支那の民族資本は勿論、地主層さへも一応戦争に関心を持たざるを得なくなかつたこと。このため、一応全国民的(民族的)抗戦の相貌を持つたことである」と、中国では「民族的抗戦」状況の形成を認める上で、さらに、「この戦争は従来の軍閥戦争とは異なつて単なる一時的妥協や小手先細工ではおさまらない激烈性を持つてゐたこと。このため、これは遅れた支那社会に対する非常に大きな激動であつたと同時に、この強力な日本軍に対抗するためには、戦争の当初から旧来の遅れた支那社会の組み替へ(再編成)を必要とした」<sup>(47)</sup>と、抗戦は中国社会に大きな変動をもたらすチャンスでもあると見なし、この変動を中国社会の「再編成」として注目していた。つまり、当時の中国社会は日本と比べると「遅れた」側面もあり、特に軍勢力において量的なものだけではなく、質的な「懸隔」もあつたと指摘した同時に、戦争は中国社会に対して変動のきっかけをも作り、「民族的抗戦」がすでに中国に形成されつつあると見ていたのである。

中西は、さらに中国側「抗戦力」の二つの発展方向を指摘し、「支那の抗戦力形成は以上の如き複雑な要素がもつれ合ひ相剋し合つて形成されるが、若しマイナスの部分の遙かに支配的ならば支那は無限の敗北となり一定時期に屈服する。併し、若しプラスの要素が軍事的消耗を補つて行けば一応持久し得る。更に若しプラスの要素がマイナス的水準を突破し、それを補つて余りあれば好転する。而も之等は日本との相対的關係に於いて存在するものである以上、かゝる抗戦力は相対的にのみ測定され得るものである」と日中戦争にお

(44) 中西功『中国革命の嵐の中で』221頁。

(45) 三一書房1970年復刻版。

(46) 『支那抗戦力調査報告』, 三一書房1970年復刻版, 10頁。

(47) 同上。

ける日本の敗北の可能性に言及した<sup>(48)</sup>。そして、中西は日中間の力関係の推移状況に関して、あえて「中共の領袖の毛沢東」の持久戦に関する「三つの段階」論をも紹介した。婉曲的な表現を使いながら、中西功は理性的・科学的データに基づく分析・情勢分析を通して、日中戦争における日本の敗北を予見したのである。

この調査報告の完成後、中西功は関東軍、参謀本部、海軍省および興亜院など日中戦争の指導・指令機関において複数回の報告会または説明会を行ったが、予想した結果にならなかった。それどころか、その報告書と報告の内容によって、逆に青年将校らの反感を買ってしまい、警視庁にも要注意人物視されてしまった。理性と冷静な判断力を失った国家権力機構の前に、ごく一部の人々の努力は如何にむなしいものだったのかを改めて示された。

中西らが展開していた調査研究活動は、立場的には敵対している勢力から提供してくれた条件を合法的な範囲内で最大限に利用しようとする試みであった。巨大な戦争マシンが一旦資本の要請と欲望の煽動によって動き出した以上、少数の民間人の努力と理性的な訴えによってブレーキをかけることはほとんど不可能であることを見破っていない点から見れば、彼らも所詮、知識人によく見られる無邪気さと学究肌のな考え方から抜け出すことができなかったと言えよう。

日中戦争中の日中関係を論ずる日本の経済学者、植民政策学者である矢内原忠雄（1893-1961）の最も重要な文章は、1937年2月号『中央公論』に載せた「支那問題の所在」という論文である<sup>(49)</sup>。

この論文のなかに、矢内原はまず、1936年12月に発生された「西安事件」の日中関係史に対する重大性を敏感に捉え、「要するに西安事件は支那の民族国家的統一事業を阻害したのではなく、又この事業の担当者としての南京政府の地位を動揺せしめたものでもない。否、却つてその処置の成功により南京政府の政治的軍事的財政的基礎の鞏固なることを示した」と、当時の一般的な日本輿論と違った視点を提起した<sup>(50)</sup>。そして、結論として、矢内原は変化的・流動的視点で「支那問題」を見る必要性を強調した。

「支那問題の所在は……その中心点は民族国家としての統一建設途上に邁進するものとしての支那を認識することにある。この認識に添ひたる対支政策のみが科学的に正確であり、終局において成功する実際の政策も亦これ以外にはない。この認識に基きて支那の民族国家的統一を是認しこれを援助する政策のみが、支那を助け、日本を助け、東洋の平和を助くるものである。この科学的認識に背反したる独断的政策を強行する時、その災禍は遠く後代に及び、支那を苦しめ、日本の国民を苦しめ、東洋の平和を苦しめるであらう。」<sup>(51)</sup> つまり、①「支那」はすでに分裂国家、分裂民族ではなく、「民族国家としての統一建設途上に邁進するもの」になりつつある。そして、②「科学的で、正確」な「対支政策」は、上記の認識に基づいて策定しなければならない。さらに、③そうでなければ、間違った「対支政策」を強行する結果として、「その災禍は遠く後代に及び、支那を苦しめ、日本の国民を苦しめ、東洋の平和を苦しめる」ものになる。この三点には密接な関連性があり、正しい

(48) 同上、14頁。

(49) のちに矢内原忠雄『帝国主義研究』（白晝書院刊、昭和23年）に収録、現在『矢内原忠雄全集』第四巻に収録されている。

(50) 矢内原忠雄「支那問題の所在」、『帝国主義研究』（白晝書院刊、昭和23年）、347頁。

(51) 矢内原忠雄「支那問題の所在」、『帝国主義研究』、359頁。

中国認識は正しい対中国政策の基礎であり、前提でもあるという論点である。

矢内原はさらに「統一建設途上に邁進するものとしての支那を認識」できる根拠を次のように列挙した。

「蒋介石の代表する南京政府は近代的武器と訓練を有する四十万の中央軍と、支那近代資本主義の中枢たる浙江財閥の支持との下に、次第に支那国家の中央政府たる実力を具備し来れるものであつて、此の兵力及び財力の前には、今日なほ未だ完全には除去されざる地方軍閥将領の勢力は殆ど問題とならない。問題となるのはただ南にあつては広西、北にあつては陝（西）甘（肅）の共産軍並びに冀東政權、冀察政權、綏遠問題等に現はたる北支の新政治情勢である」<sup>(52)</sup>。しかし、この共産党との関係も、抗日民族統一戦線の方で収拾がなされようとしていた。

このような近代中国の激変に対して、冷靜的・客観的な觀察を行えば、誰でも似たような結論に到達できると考えられる。しかし、これまで日本社会に氾濫していた「支那觀」は、的確な中国認識の形成にとって、大きな障害となっている。それについて、矢内原忠雄は危機感を抱いていた。

「支那人には商利の打算あるのみであつて国家心がないとか、或は支那人の国民性は個人主義であつて愛国心がないとかいふ如き觀察は、封建的前資本主義的時代における支那社会の觀察を永久化するものであつて、これを以て民族国家形成期における支那人の思想をば律することは根本的に誤謬である。その事は多くの説明を要せずして、今日支那全地に澎湃たりと言はれる抗日精神そのものがこれを実証する」<sup>(53)</sup>。要するに、日本に氾濫している多くの「支那」觀察は「封建的前資本主義時代における支那社会」に対する觀察である。その觀察自身は間違っていない。けれども、その觀察の結果と結論を「永久化する」ことは間違っている。矢内原の言う「根本的に誤謬」となる。そして、現在の「民族国家形成期における支那人の思想」はすでに民族主義が台頭・發展しており、それによる民族的団結も実現可能である。「抗日精神」の勃興はそれを実証している。

実際に、この論文を執筆前の1936年12月に書かれた「民族精神と日支交渉」という時論の中に、矢内原忠雄はすでに同じような見方を示している。

「今日の支那は……民族国家建設の時期、從つて民族精神形成の最中にある。殊に滿洲事變及び北支問題以後、支那の民族国家的統一は急激なる刺戟を受けたのである。米国新聞業者ハワード氏が最近支那を觀察したる感想によるに、『支那人は南は広東から北は北平に至るまで、下は苦力から上は資本家に至るまで、強烈なる統一国家の意識に燃えて居る。支那には統一国家がないとか、支那人は国家思想がないとか言つて居た従来の認識は改められなければならない』と。之は恐らく真実の觀察であると思はれる。事実としては統一的民族国家としての支那は未だ完成の余地を多く残して居るにしても、統一国家建設の氣運、統一的民族精神の發生は、之を誤りなく認識しなければならない。それは歴史の命令である。支那人には国家思想がないとか、支那には政治的統一国家が有り得ないとか、恰もただ商利にのみ関心を有して愛国心の無きことが支那人の先天的固定的素質でもあるかの如き認識を有つ者は、社会發展の歴史性についての科学的無智者であつて、最大の誤謬に陥れるものと言わねばなるまい。若しも斯くの如き非科学的なる認識に基いて対支政

(52) 矢内原忠雄「支那問題の所在」, 346頁。

(53) 矢内原忠雄「支那問題の所在」, 348-359頁。

策を計画し遂行せんとする者あらば、その弊害その危険如何ばかりぞや」<sup>(54)</sup>。残念ながら、矢内原忠雄の行った中国現状分析とそれに基づいて発した警告は、ほとんど当時の日本の行政・軍政の当局に無視され、彼の最も恐れていた「その災禍は遠く後代に及び、支那を苦しめ、日本の国民を苦しめ、東洋の平和を苦しめるであろう」という予言は不幸にして歴史の事実になってしまい、今日まで尾を引いている。

同じく第二次世界大戦の渦巻きに巻き込まれた外交官・政治家である佐藤尚武(1882-1971)は、同時代の大半の日本人が中国を見た時の目線に危機感を抱かれざるを得なくなった。昭和12年(1937年)2月林銑十郎首相から外務大臣として入閣の要請を受けた際、自分の対中国政策のスタンスを、次のように述べた。

「とにかく日本の朝野は支那を相手とする場合、ある優越感をもってこれに臨まんとするふうがある。これは最も忌むべきことであって、こういう考えを持している以上、友好関係を持続することはとうてい不可能である。よろしく平等の立場に立って、そして国交を調節すべきである。また日本人は支那人を見れば、ばくぜんと、日清戦争当時のことを思い出し、いかにも支那は弱い国で鎧袖一触という考えを、ほとんど皆が例外なく持っている。これがまたそもそもの間違いである。現在の支那は、もはや、とうてい四十年前の支那ではない。蒋介石があおった抗日精神をもって統一した今日の支那は、はや昔日の支那ではない。その新たな力は、日本としても明白にこれを理解しなければならぬ。ところが日本のいわゆる支那通なるものの多くは、ややもすればこの力を認めることを欲しない。……こういう偏狭な支那観を持った連中が、まさに国家を誤らんとするものであることを、私はおそれてやまない。」と。

佐藤は変形されていて、「偏狭な」支那観を作り上げた「支那通」たちの社会に対する悪影響を批判し、間違った道へ「国家誤らんとする」政治的傾向の存在に警鐘を鳴らし、さらにその中国に対する歪んだ認識を矯正しようとした。<sup>(55)</sup>

しかし、矢内原忠雄の議論は、近代日本の対中国政策決定のプロセスに対して、影響を及ぼすほどの力までになっていなかった。それだけではなく、世論形成の面においても、主流的な意見あるいはある程度の影響力を持つ世論の一つにもなっていなかった。佐藤尚武の発言は外務大臣のポストもある関係で、実現したければそれができるはずだが、「出先の軍は佐藤さんの演説くらいは木でハナをくくった態度で黙殺する」姿勢を取ったため、戦争マシンの突進を多少でも減速できるブレーキや鎮静剤としての役割を果たすこともできなかったという結末になったのは、歴史の悲劇と言える。

## 終わりに 「英知」か「無知」か——「支那通」「エリート」たちが残された歴史的教訓

「支那通」という呼称は、そもそも精密な定義を伴っていない一般的な呼び方で、近代以来、およそ中国事情についてある分野のことだけでも精通している人間ならば、「支那通」と呼ばれることは、屡々見られる。その部類に入れられる人々は、一般的な情報通から、中国研究の専門家まで包容範囲はかなり随意的であり、複雑な人間によって構成されている感じがする。彼等に対する歴史的評判も芳しくなかった。

(54) 「民族精神と日支交渉」、『矢内原忠雄全集』第十八巻、岩波書店1964年、596-597頁。

(55) 佐藤尚武『回顧八十年』、時事通信社、昭和38年、358頁。



例えば、中国で有数の「日本通」である周作人は、

「中国にやってきた日本人の多くは浪人や支那通の類いである。彼らは中国を全く理解できず、ただ古い中国の事情に対して上辺だけの観察心得を持っていて、詩吟やお辞儀を習って、マージャンと打茶囲（女郎屋でお茶を飲むことなど）の技能を習得するだけで、中国を知り尽くしていると思ひ込む。実は、彼は中国の悪い慣習に多少伝染される程度で、勝手に悪い中国人の数を増やすだけのことをやったのである。」<sup>(56)</sup>と厳しく批判したこともある。日本占領軍に協力的な姿勢を取っていた周作人でさえ、このような「支那通」のイメージしか持っていなかったことから、当時の中国における「支那通」像はどれほどマイナスな存在だったのかと窺える。

本学（千葉商科大学）商経学部の元教授野村隆夫も、自らの体験で「支那通」「エリート」たちは結局のところ「無知」だったと語ったことがある。野村氏がかつて『戦後50年シリーズ4』「戦争か平和か——太平洋戦争史観の一つの試み——」の中に、「戦争の責任と反省」に言及し、「エリート」の「知識人については多くの日記が残されているが、一言でいえば、その多くが知識人の政治・戦争についての無知を物語っていて悲しい」。さらに、元大本営参謀瀬島龍三が東京新聞記者のインタビューに応じて「独伊は不敗だと思っていたから、太平洋戦争は勝利できると考えていた」と述べた例を取り上げ、「正直いって、陸軍大学を一番で卒業したエリート参謀が、このような常識外れの判断力しか持ちえなかったことが不思議だった」と批判した。なぜその判断力を「常識外れ」と批判できるかという点、太平洋戦争開戦当日、大学文学部一年生だった野村氏は旧制高校の同級生だった友人らが戦争の前途を議論したところ、「戦争の最終的勝利を予想したのは、親ナチ派の〇君一人で、他の六人は私をふくめて戦争の敗北に賭けたのである」。「いかにも恐ろしいかけであった。しかし、当時の大学生には、戦争が勝利か敗北かのいずれに終わるかを判断するくらいの『常識』はあったのである。いわゆる軍エリートがいかに無知であったかが分かる」<sup>(57)</sup>。

無知が原因で、誤った「中国認識」や固定化された「支那人」「国民性」認識、「中国イメージ」を現実の中国像として認識してしまい、情勢判断を誤らせ、対中国政策とその方針を間違った方向へと誘導してしまった結果になったのである。

大川周明は最後、中国の現実に対して誤認識をしたことを認め、反省したことがある。

「我等は此の四半世紀に於ける支那の非常なる変化を認めねばならぬ。若し日本が現在の支那を以て、清朝末期又は軍閥時代の支那と同一視して居るならば、直ちに其の認識を更めねばならぬ」と<sup>(58)</sup>。

もちろん、最も根本的な誤りは、近代日本の国際戦略を「興亜」（アジアの協力と共同的発展）から「脱亜」「征亜」（アジアを犠牲にして日本一国の発展を図る）への転換にあり、そのため、侵略戦争を起こしても辞さない対外侵略・拡張主義的な「大陸政策」にある。

本人の方法論、立場の問題もあるが、敗戦まで日本インテリ層の大半の中国認識（中国人国民性論を含む）は、このような時代的な呪縛から抜け出すことができず、むしろ積極的に迎合することになった結果、彼等の中国・中国人の国民性に対する認識は結局、誤認

(56) 周作人「日本與中国」（中華民國十四年十月三日）、周作人著『周作人論日本』陝西師範大学出版社、200年9月、174-175頁、日本語訳は筆者。

(57) 『労働運動研究』1995.9、17頁。

(58) 大川周明「大東亜秩序建設」、『大川周明全集』第二巻、岩崎書店、昭和37年、801-802頁。

識になってしまい、歴史に大きな教訓が残されたのである。

付記 この論文は、平成26年度在外研究員として研究した結果についてとりまとめたものである。

研究期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

研究課題 近現代中国におけるアジア主義・大アジア主義に関する継続研究

研 究 先 華中師範大学中国近代史研究所, 北京大学歴史学系, 香港大学アジア研究センター, 台湾中央研究院近代史研究所

(2016.7.25 受稿, 2016.9.3 受理)

## 〔抄 録〕

1894~95年の日清戦争を通じて中国を大敗させた日本国内では、にわかに「清朝蔑視論」が勃興し、これまでの中国に対する認識とイメージを一変させた。その後、「清朝・中国蔑視論」はさまざまな形で日本社会に流布し、1945年8月の敗戦まで続いていた。インテリ層の中でも優越感を抱く姿勢や一方的な視点で「中国」と「中国人」を観察する者が増え、彼等の認識と主張は近現代日中関係の推移に大きな影を落とした。「支那通」あるいは「エリート」と呼ばれた川島浪速、内田良平、大川周明、平野義太郎などの人々の「中国認識」について、中国人の「国民性」に対する認知を中心にいくつかの具体例を通して、その思想的・文化的背景や特徴及び歴史の推移に対する影響を考察してみた。そして、「濁流」の中の少数派として、宮崎滔天、矢内原忠雄、中西功、佐藤尚武らの中国人の「国民性」に対する認知と「中国認識」をも紹介した。